

## 保 育

# 思考力の芽生えを培うための環境・援助のあり方とは

## —感じ、考え、試す4歳児の姿から—

中山 芙 充 子

### 1. はじめに

平成20年に改訂された幼稚園教育要領において、「周囲の環境とかがわり、好奇心を抱き、様々な気づき、幼児自ら考えようとする気もちが育つこと」<sup>1)</sup>が「思考力の芽生え」という言葉で表され、思考力の芽生えを培うことにより、幼稚園教育の充実を図る必要性が述べられている。

このような思考力の芽生えは幼児期にどのように培われるのであろうか。本来、幼児は、好奇心旺盛な存在であり、新しいもの未知なものに出会うと、すぐ動き出しかかわり始める。中でも「4歳児は、知りたがりやの試したがりやで、世界は、知らなくてはならないものに満ちあふれているといった感じで、追求を始める時期」<sup>2)</sup>であるといわれている。そんな4歳児の様子を見てみると、一見無意味に思えるようなことを繰り返しやっていると見えることがある。しかし、一緒に遊んでいると、「あれ?」「どうして?」とか「次はこうしてみよう」などのつぶやきを子どもから聞くことができ、不思議に感じたり、もっと面白くしようと自分なりに考えたり試したりしながら様々な発見や驚きをしていることが分かる。

このようなことから、子どもが興味をもち、好奇心を抱いて環境にかかわり、「感じ、考え、試す」体験を積み重ねていく中で、自ら考えようとする「思考力の芽生え」が培われると考えられる。そしてそのためには子どもが、感じたり考えたり試したりしながら行動や言葉に表していることから内面を理解し、心の動きに添いながら教師がかかわり、環境を整えていくことが大切であると考えた。

そこで、本研究では、幼児期に「思考力の芽生え」を培うには、教師はどのような役割を担い、どのような環境構成や援助をしていけばよいのか、ということについて考えていきたい。

### 2. 研究の構想

#### (1) めざす子どもの姿

4歳児は、興味をもち、好奇心を抱いたものには繰り返しかかわり、もっと面白くしたいと考えたり試したりしながら自分らしさを発揮して遊ぶようになる時期である。その中で、一人ひとりのかかわり方や「こうしたい」という思いは様々である。また一方で、友だちのしていることに関心をもち、同じことを一緒に楽しみたいという気もちが生まれ、友だちとのかかわりが活発になる時期である。

そこで4歳の時期には、好奇心を抱いたものに繰り返しかかわりながら、自分なりにあるいは友だちとの刺激を受けながら感じたり考えたり試したりする中でこそ、思考力の芽生えが培われると考える。そこで、本研究のめざす子どもの姿を次のように設定した。

自分なりにあるいは友だちの刺激を受けながら感じたり考えたりし、遊びがより楽しくなるように試してみようとする子ども
--

#### (2) 思考力の芽生えを培うための具体的方策

めざす子どもの姿を受けて、思考力の芽生え(感じる・考える・試す)を育むための環境構成や援助のあり方を次の通りに考えた。

・心揺さぶられるような環境構成や教師の援助

- ・一人ひとりの興味関心や思いを受け止めたり、心の動きに寄り添ったりするような教師の援助
  - ・子どもがやってみみたいと思ったことに対してすぐにあきらめないような教師の援助
  - ・友だちのいろいろな思いや考えにふれる環境構成や教師の援助
  - ・興味関心をもったことに繰り返し取り組める環境構成や教師の援助
- これらの環境構成や教師の援助をもとに、実践を積み上げていきたい。

### 3. 実践事例

#### 実践例1 「シャボン玉ができない！」 9月7日

年長児がシャボン玉を吹いている姿に影響を受け、「先生！ストローちょうだい！」「シャボン玉、やってみたい！」という声があがる。そこで教師は、一人に一つずつ、透明コップとストローを用意する。

まずは、繰り返しシャボン玉を膨らませることが楽しくて仕方がない様子の子どもたち。ところが、思うようにシャボン玉ができず「せんせい。シャボン玉ができません」とA男がやってきた。「どうしてできないんだろうね。ちょっと吹いてごらん」と言うと、早速吹いて見せてくれる。

ところが、思いっ切りいきおいよく、ふっ！とストローを吹いているため、全く膨らまない。A男としては、何としても、膨らまそうと一生懸命なのだ。シャボン玉はなかなかできず「ほら、できない～」と悔しそうに言っている。次は「分かった！もっとたっぷりシャボン玉の液をつけたらいいのかな」と長い間液につけて再びいきおいよく吹いていくが、なかなかできない。教師も一緒に「どうしてかなあ。なんでシャボン玉ができないのかなあ」と悩んでいた。

するとそんな様子に近くにいたB女が気づき「先生、どうしたの」と聞いてきた。「A男君がシャボン玉が膨らむように一生懸命吹いてるんだけどね、シャボン玉がなかなか膨らまない

の。どうやったら膨らむんだろうねえ」と言うとB女が「A男君、そっとね。ふうふって吹くことができるよ」とやって見せてくれる。確かに、B女が優しく吹くとシャボン玉ができています。教えてもらったA男も、“そうか！”といった表情をして早速試してみる。すると、少し膨らみかけてパチンと割れてしまう。しかし、今まで膨らみもしなかったA男は「ふくらんだ！」と大喜びしている。2回目には、見事にシャボン玉が膨らみA男は「やったあ。シャボン玉できた～！」と満面の笑顔で飛び跳ねて喜ぶ。B女も教師も思わず一緒に飛び跳ねて喜んだ。

その後はコツをつかんでシャボン玉を膨らませるようになり、友だちと一緒に築山の上など色々な場所からシャボン玉飛ばしを楽しんでいた。

#### 【考察】

A男は、生活の中でも思うようにならないとぶいっと怒ってすぐにやめてしまう姿が見られていた。そのため、A男がシャボン玉が膨らまないという問題にぶつかり教師に助けを求めてきた時に、A男の思いを受け止めながら、なんとか自分の力で吹けるようになってほしいと願った。そこで教師は、答えは出さずに「どうして膨らまないのんだろうね」とA男の気もちに寄り添いながら、A男の試行錯誤を見守ることにした。悔しがりながらもあきらめずに何度も吹いたり、自分なりに考えて試したりするA男の姿から、教師に見守られることで安心して取り組んでいることが分かる。このように、子どもが問題にぶつかった時に、気もちを受け止め、寄り添う教師が側にいることで子どもは安心して、意欲をもって考えたり試したりできると考える。

また、A女とのやりとりの場を作ることで、友だちのやり方から刺激を受けて、まねをしながら膨らますことができた。笑顔で飛び跳ねて喜ぶA男の姿からは、試行錯誤しながら友だちとのかかわりの中で自分の力で行うことの満足感を味わっていたことが分かる。幼児がこのような満足感を味わうことができるようにするには、教師が一方

的に答えを出すのではなく、幼児の心の動きに沿って共に心を動かしたり、知恵を出し合う友だちとのかかわりをつなげたりするかかわり方が大切であると考え。

## 実践例2 「虹色シャボン玉」 9月10日

天気の良いある日。シャボン玉を繰り返し吹きながら「あ！虹色が見えた！」とC男がつぶやく。教師は「え？虹色が見えたの？どこに？」と驚きながら聞いてみると、「シャボン玉の中に虹色があった！見てて」と言いながら、もう一度シャボン玉を作る。その姿を周りの子どもたちも注目して見ている。本当に虹色に光って見えるので、「ほんとだ！」と大騒ぎになった。すると、「太陽の光があたると虹色になるんよ」とD女。

そこで、みんなで太陽の光のあたるところで、シャボン玉を吹いてみると、さらにきらきらと七色に光るシャボン玉になった。「せんせい、見てー！金色に見える」「せんせい！ぼく、紫が見えた！」「赤と青も見えた！」と口々に見えた色を言って喜んでいる。しばらくすると、「あ！シャボン玉の中に木も見える！」とB君。よく見れば、藤棚の木の葉っぱが映っている。「本当じゃ！木が見える！」「あ！せんせいが見える！」「あ！おうち（園庭のおもちゃの家）！」などと、シャボン玉の中に、周りのものが映って見えることや様々な色に光って見えることを発見し、子どもたちは大喜びしている。さらに「あっちだったら、もっと違う色が見えるかも」と築山にかけていった。

### 【考察】

子どもが環境に興味を示し、好奇心を抱いてかかわっていく時に、他の子どもの考えや行動に触れることで、新たな考えが浮かんだり、もっと面白くなったりする。子どもがお互いの考えや発想にふれることができるような環境にしていけることが大切である。

シャボン玉遊びに興味をもってかかわる中で出

てきた、「見てー！」という言葉から、感じたことや発見したことを教師や友だちに聞いてほしい！見てほしい！という気持ちを持っていることが分かる。教師は、一人ひとりの思いを丁寧に受け止め、一緒に感動したり考えたりするようなかかわりを心がけていった。このようなかかわりを続けることで、子どもたちが自分の興味をもったことや考えたことに対して好奇心をもって繰り返しかかわったり試したりする面白さや不思議さを感じていくのではないかと考えている。

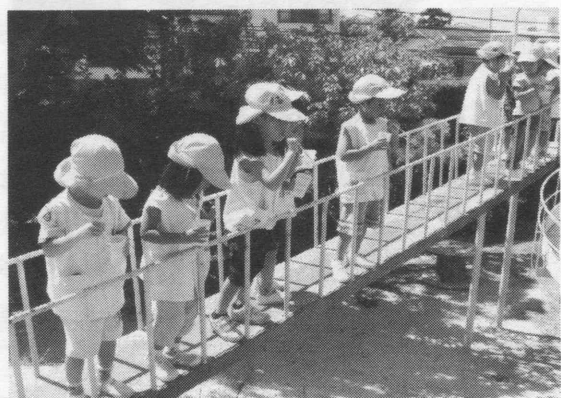


図1 高いところからシャボン玉をとばしてみよう！

## 実践例3 「泡ぶくぶく楽しいね！」

### ①9月14日「みんなで泡ぶくぶく」

ひとしきり、シャボン玉を楽しむといつも最後は、泡をぶくぶくとたてていく。ストローをシャボン玉液に浸けて思い切り液に息を吹き入れると、見事な泡がたつ。一人が泡をたて始めると、みんなまねをして泡をたてている。

しばらくすると「F女ちゃんこっちきて！G男君も！」と誘い合う声が聞こえ始めた。見ると、お互いの泡を合体させて喜んでいる。気づけば、最大7～8人で輪になって泡をつなげてひたすら泡をぶくぶくとたてている。「そろそろお弁当にしようか」という教師の言葉に「まだやりたい～」と言う子どもたち。結局、教師がお弁当の時間を遅らせたことで、子どもたちはシャボン玉液がなくなるまで、思う存分泡ぶくぶくを楽しんでいった。そうする中で、「ブドウみたい」「たまごみたい」「滝みたい」と

形からイメージを膨らませる姿も見られていった。



図2 「泡ぶくぶくたのしいね！」

② 9月15日「つめたいけど、あったかいよ」

次の日、朝登園するとすぐにH女が「I女ちゃん、昨日の泡ぶくぶく一緒にしよう！」と誘って石けんコーナーにかけていった。いつもは、いろんな所でシャボン玉を吹いていたが、この日は、石けんコーナーで座ってシャボン玉をしている。

そのうち、泡ぶくぶくへ突入する。泡がカップからあふれると、調度よく机にたまっていく。すると「山みたい〜！」とH女。二人の瞳が輝き、何も言わないのに自然に泡をくっつけて思い切り泡をぶくぶくとたてていく。

しばらくすると、I女が手をそっと泡の山に入れ、「わあ。きもちいい」とつぶやいた。H女も手を入れて「つめたいけど、あったかいね」と言いながら、泡の感触を味わい、再び泡をぶくぶくとたてていく。

それを見ていたJ女が「せんせい、お庭よりおっきい泡のお山作りたいね！みんなで泡をくっつけたらあの木(園庭で一番大きなヒマラヤ杉の木)より大きくなるかも〜」と言いながらイメージを膨らませている姿も見られた。



図3 「泡のお山ってきもちいい」

【考察】

4歳のこの時期は、息を吹き入れるだけで簡単にできる泡ぶくぶくが大好きである。また、友だちと泡を合体させることは子どもたちにとっても魅力的な活動であった。友だちと一緒に遊ぶ楽しさを感じるようになるこの時期には、このように友だちから刺激を受けながら試してみる活動を取り入れることが大切である。

①では、「まだやりたい〜」という子どもの言葉から夢中になって泡をたてることを楽しんでいたのが分かる。そこで、教師は弁当の時間を遅らせ、泡をたてて遊ぶことにじっくり取り組める時間を保障していった。その結果、子どもたちは心ゆくまで試し、新たなイメージが膨らんでいった。

②では、前日の泡ぶくぶく遊びの体験から友だちと誘い合って、再び試す姿が見られた。この姿から、前日やりたいことを心ゆくまで十分にすることで、満足感を味わい「もう一回やってみたい」という気持ちが育まれ、次の日へと遊びが継続していったことが分かる。このことから、感じ考え試す中で、興味・関心をもったことに十分に向き合い、子どもなりにかかわることができる時間や空間を確保することが大切であると考えられる。

また、②では手からの感覚を通してそれぞれ感じたことをつぶやいている。「つめたいけどあったかいね」という言葉は、教師にとっては驚きの表現であった。実際に教師も手を入れてみると、最初は冷たく感じるのだけれど、しばらくすると

本当に温かく感じたのである。このことを表現した言葉だったのかと教師も直接体験する中で実感するとともにその表現の豊かさに感動していった。このように、子どもならではの表現の仕方を大切に、教師自身も心から遊びを楽しみ子どもと一緒に感動する存在であることが必要である。こうして友だちや教師と共に感動し心揺さぶられる体験を積み重ねていく中で、子どもの表現はさらに豊かなものになっていくと考える。

#### 実践例 4

「水はちょっとで、ずっと混ぜとるだけよ」

9月21日

年長児に見せてもらったことをきっかけに、年中児でもひっくり返しても落ちない泡づくりが始まった。

K男が色水・石けんコーナーにやってきて、しばらく友だちが落ちない泡づくりをしている様子をじっと見ている。「K男君。どうしたの？」と教師が声をかけると、後ろから教師の肩によりかかり、「ひっくり返しても落ちんやつ」とつぶやく。「K男君も、一緒にやってみる？」と教師が聞くと笑顔になってうなずく。「K男君、落ちない泡作ったことある？」と聞くと、首を横にふる。そこで、泡づくりをしていた子どもたちに「K男君も先生もひっくり返しても落ちない泡の作り方わからないなあ。どうやって作ったらいいか教えてほしいなあ」と言うと、「水入れて、石けん入れて、好きな色の紙を入れるんよ」「水は半分よ」「そう。水はちょっとよ！」と口々に言い始める。そして、J女が「このボールを使うんよ。こっちに来て」と水道にK男と教師を連れていき、丁寧に教えてくれる。

それを聞き、K男もボールを手に持って水道に行く。見ると、J女に教えてもらった通りに水道をほんの少しひねって、2～3滴の水のしずくをボールに入れている。そして、花紙と石けんを入れて、泡だて器で混ぜ始め

る。しばらく黙々と2～3滴の水を入れ、かき混ぜたり石けんを削ったりが繰り返されていく。そのうちにK男のボールにもとてもきめ細やかな泡ができていた。

「わあ。K男君。きれいな泡～！」と教師が驚くと、笑顔になり「ひっくりかえしても落ちん」と言ってボールをひっくり返して見せてくれる。なんだか少し得意げな表情である。「本当だ！落ちないね！ぴったりくっついているね～」と教師が言っていると、「すごい！どうやったん？」とL男が聞いてくる。K男は照れたように笑いしばらく黙って、「水はちょっとで、ずっと混ぜとるだけよ」と小さな声で言う。「そうか。水はちょっとで、ずっと混ぜると落ちない泡ができるんだね。先生もやってみよう！」と言うと、「僕もやってみる！」とL男。その後も、L男と一緒に落ちない泡づくりは続いていった。



図4 ひっくりかえしても泡がおちないよ！

#### 【考察】

教師は、引込み思案なK男が友だちの泡づくりをじっと見ている姿から「おもしろそう」「やってみてみたい」と感じながらも実際にやってみることに躊躇している気持ちを感じ取った。教師が泡づくりに挑戦するきっかけづくりをしたことで、K男は夢中で泡づくりを続けたことから、興味をもったことに対してかかわったり試したりするおもしろさや楽しさを感じていたことが分かる。このように教師が子どもの表情や言動から子どもが何を感じ、考えているのかを見とり、受け止めた

がら実際に試してみるきっかけづくりをしていくことが大切である。そうすることで、子どもたちが主体的に感じ、考え、試すことを体験し、遊びを深めていくと共に、思考力を培うことにつながると考える。

「水はちょっとで、ずっと混ぜとるだけよ」というK男の言葉からは、K男が繰り返し試す中で水の量と混ぜ具合によって落ちない泡ができることに気づいていたことが分かる。このように、子どもは遊びの中で様々なものとかかわり、考えたり、試したりしながら、素材のもつ多様性に出会い、その物の性質や仕組みについての新たな発見がもたらされるのである。このような子どもの発見や気づきを教師が言葉に表すことで、子どもが気づきを意識していくようにすることが大切である。このことで、子どもは分かる喜びを実感し、自ら考えようもつと試してみようとする意欲が育まれていくと考える。

#### 実践例5

「ねこじゃらしのふわふわが磁石になったよ！」

9月30日

「ねこじゃらし見つけた～！色水に入れてみる！」とM女がねこじゃらしを握りしめて色水・石けんコーナーにやってくる。そしていつものように泡づくりが始まる。しばらくすると、ねこじゃらしの先を泡に入れてクルクルと回し始めた。どうやら、泡だて器のつもりようだ。ひとしきり回して、すっとすくいあげると、見事に泡がねこじゃらしにくっついている。

「あー！ねこじゃらしについて、泡が落ちない～！せんせい、落ちない泡ができた～！」とM女が見せにくる。「本当だ！泡落ちないね。泡の中に、何が入ってるの？」と聞くと、「ねこじゃらし！ねこじゃらしのふわふわが磁石になって泡がくっついたんよ！」とうれしそうに言っている。「ふわふわが磁石になってくっついたんだ。ふしぎだね～。なんだか気持ちよさそうだね。」と教師が言うと、「これねこじゃらしのホット ケーキなんよ。食べてもいいよ」

とM女がねこじゃらしを差し出す。「わあ。おいしそう。いただきま～す！」と言いながら食べるまねをしていると、N女が興味をもってやってくる。

N女が「なあにそれ？」と聞くと「これねこじゃらしのホットケーキ、ふわふわに泡がくっついておちんのんよ」とM女が得意げに言っている。

教師が「ねこじゃらしじゃないものでも、泡がくっついて落ちないものってあるのかな？」と聞くと、しばらく考えてから、「ひつつきもつつき（おなもみ）は絶対くつつくよ！」とN女が、「あ！秋の葉っぱもくつつくよ」とM女が言うと、二人で近くの桜の木にかけていく。

そして、真っ赤な小さな落ち葉と黄色の大きな落ち葉を持ってきて、泡に葉っぱを入れると見事に泡がくっついたのである！思わず「わあ～！やっぱりくつついた～！せんせい、見て～」と喜ぶ二人。M女「この（周りの）ギザギザが磁石になつとるんよ～。今度は、葉っぱのお寿司（泡がしゃり、赤い葉がねたの握り寿司）になった～」と言いながらひとしきり喜ぶと、再び他の素材を探しにかけていった。



図5 「ほら、くつついたよ」 図6 葉っぱのお寿司

#### 【考察】

教師がM女の発見や驚きを受け止めながら、くつつける素材を探すきっかけづくりを行ったことで、子どもの発想が膨らみ、次への工夫へつながっていった。ここでは、M女の「やっぱりくつついた～！」「ギザギザが磁石になつとるんよ」という言葉から、自分なりに「ギザギザしたもの

がひっかかりになってくつつくのではないか」と予測して試していたことが分かる。このように子どもが予測して考えることができたのは、ねこじゃらしで落ちない泡を作った経験やそれまでのいろいろな経験の蓄積によるものである。子どもがおもしろいと心動かした時を見逃さずに、教師が気づきを受けとめたり、意図的なきっかけづくりをしたりすることで、子どもの意欲が高まり、子どもがそれまでの経験を生かしながら考えたり試したりすることにつながっていくと考える。

M女は“ふわふわの磁石”“ねこじゃらしのホットケーキ”“葉っぱのお寿司”など、泡が落ちないという現象から様々なイメージを膨らませていった。この過程で教師が、M女と共にイメージを楽しみ、その世界に入り込むことで、子どもの次の発見への意欲につながり、新しいイメージを引き出すことが分かった。想像の世界を楽しむイメージを共有するようになる4歳児のこの時期、このように子どもが環境にかかわる中で考えたり試したりし、自分なりのイメージを膨らませていく過程を大切にすることが、子どもの新たな発想や考えを広げていくことにつながると考える。

#### 4. 実践を終えて

実践により、子どもが身近な環境にかかわる中で、新たな気づきをし、心を弾ませて思わず見たり触れたりやってみたりしている時、心ゆくまで感じたり考えたり試したりを繰り返して遊んでいる時などに、思考力の芽生えを育む場面が見られることが分かった。このことから、思考力の芽生えを培うための環境・援助のあり方について大切だと思われる点が次の通り明らかになった。

##### ①心揺さぶられるような環境構成や教師の援助

子どもが主体的に環境にかかわる中で思考力の芽生えが培われることから、何よりも身近な環境が魅力的であることが重要である。子どもの興味関心に応じ、子どもの発想が活かされるような素材・材料があり、心を動かされる出来事に出会えることが大切である。

##### ②一人ひとりの興味関心や思いを受け止めたり、

##### 心の動きに寄り添ったりするような教師の援助

子どもたちは、心揺さぶられる出来事に出会うと感じたことや気づいたことを見てほしい聞いてほしいという気持ちがわいてくる。子どもの発見や発想を認め、ともに感動する教師のかかわりがあることで、子どもが考えたり試したりする意欲につながっていくと考えている。また、言葉に表れることだけでなく、表情や行動からも子どもが今、何に興味をもっているのか、何をやりたいと思っているのかを理解しようとしながら、心の動きに寄り添うことも大切である。

##### ③子どもがやってみたいと思ったことに対して

##### すぐにあきらめないような教師の援助

感じ考え試すことを繰り返し行う中で、思考力の芽生えが培われることから、子どもがあきらめずに自分なりの方法でやってみようとする意欲がもてるような援助が必要である。特に4歳児は、「どうしたら～できるんだろう」と考えながらやってみるけれど、なかなかうまくできずに、教師に助けを求めてくる姿がよく見られる。このように子どもが問題にぶつかった時に、やろうとしたことを認めてくれる教師、「どうしてうまくいかなかったのかな」と寄り添ってくれる教師が側にいることが大切である。また、教師が友だちとのかかわりをつなぎながら、友だちを媒介として具体的なやり方を考えたりやってみたりできるような援助することも大切である。このような温かい雰囲気の中で、子どもは感じ考え試すことを繰り返すことを通してより難しそうなことにも挑戦しようとする気持ちや、自分で満足するまで粘り強く取り組む姿勢が培われると考えている。

##### ④友だちのいろいろな思いや考えにふれる環境構成や教師の援助

実践では子どもが環境に興味をもってかかわっていく時に、友だちの考えや行動にふれることで、新たな考えが浮かんだり、遊びがもっとおもしろくなったりしていった。このことから教師は、子どもの発見の驚きや感動を共に楽しむ友だちの存在をつくったり、互いに刺激し合う友だちとのか

かわりをつなげたりしていくことが大切である。

### ⑤興味関心をもったことに繰り返し取り組める環境構成や教師の援助

実践例3では、子どもたちは、やりたいことを心ゆくまで十分にすることで、満足感を味わい、「もう一回やってみたい」というさらなる意欲をもって遊びを継続していく姿が見られた。このことから、興味をもったことに十分に向き合い、自分のペースで好きなだけ何度でも繰り返しかかわることのできる時間や空間を確保することが大切である。

以上のように研究をすすめる中で、幼児期に「思考力の芽生え」を培うためには、子どもが夢中になって遊ぶ中で、感じ、考え、試すことを繰り返し取り組める環境構成やそれを支える教師の援助の重要性を改めて実感することとなった。

それとともに、子ども一人ひとりが今、何に興味をもっているのか、何をやりたいと思っているのかという内面を表情や言動から理解しながら、その心の動きに添った環境・援助をすることができていたのだろうか。もっと心動かされる環境構成や援助ができたのではないかという課題も残った。

子どもが自ら考えたり試したりする意欲を育てるために、教師はどのような環境を整え、どのような時に見守り、どのような時にかかわるのか。そのことを常に考えながら、今後も子どもたちとかわり合っていきたい。

### <参考・引用文献>

- 1) 文部科学省：「幼稚園教育要領解説」，p. 133, 2008, フレーベル館.
- 2) 森上史朗：「4歳児の世界」，森上史朗編，p. 10-11, 1986, 世界文化社.